慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治期の辞書·辞典 - 青木輔清の著作の中から -
Sub Title	
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2005
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.48, No.5 (2005. 12) ,p.247- 264
JaLC DOI	
Abstract	明治初期から中期にかけて，夥しい数の字引き・ 字典類が刊行されているが，その中で多くの啓蒙的な著作を出し，辞書の編集者としてもそれなりに活躍した人物の中から，青木輔清を選び，彼が関わった30余点に及ぶ字書・ 辞典類について，その半数程を中心に諸版の有様を紹介し書誌的な考察を加えたもの。
Notes	故玉置紀夫教授追悼号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20051200-0247

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第48巻第5号
2005年12月

2005年11月30日掲載承認

明治期の辞書・字典

――青木輔清の著作の中から――

関　場　　武

＜要　　約＞
明治初期から中期にかけて，夥しい数の字引き・字典類が刊行されているが，その中で多くの啓蒙的な著作を出し，辞書の編集者としてもそれなりに活躍した人物の中から，青木輔清を選び，彼が関わった30余点に及ぶ字書・辞典類について，その半数程を中心に諸版の有様を紹介し書誌的な考察を加えたもの。

＜キーワード＞
キーワード：青木輔清，字引，字典，字彙，節用集

Ⅰ　はじめに

明治初期から中期にかけて，夥しい数の辞書・辞典が編集・刊行された。外国語対訳のものを除くと，その大半は，前代から続く辞典類：節用集・玉篇・字彙系統のものであり，それに新しく漢語辞典類が加わったものと見ることができる。そして，さらに，和漢の教科書・史書のアンチョコとしての字引・字解・字類のたぐい。これも明治期を通じて数多く編纂・出版されている。その大要は，山田忠雄氏の「近代國語辭書の歩み――その模倣と創意と――」（昭和56〈1981〉．7　三省堂）の附表に明らかであり，漢語辞典に関しては，松井利彦氏の「近代漢語辞書の成立と展開」（平成2〈1990〉．11　笠間書院）に御論考がある。明治初期には，前代から引き続き辞書とも繋がりが深い往来物の刊行が盛んであった。「消息往来」「商売往来」，合書型往来の「古状揃」，それに「七ツいろは」の流れを汲む字類。これらが陸続と印刷に付され刷を重ねている。それらの編著書を眺めて行くと，辞書・往来物を含め幅広い著作活動をしている人物が何人か浮かび上がって来る。橋爪貫一，青木輔清，西野古海らである。橋爪については，先年，その一部の紹介をしたことがあるので，[1] 今回は青木の数多い著作のうち，字引・辞典類を中心に，手近のものを使い紹介することとし

たい。

II　字類大全，漢語字彙，小字典

青木輔清の編著書は，小生の調査の範囲では現在のところ80余点に上る。その中，辞書・字典と目されるものは約30点。かなりの割合を占める。大半は，漢字・漢語に関するもの或いは節用に属するもので，合本形式のものも目に付く。忍藩洋学校の教授を務めたこと等もあってか，英和辞典も２種ある。書型は袖珍本，すなわち現在数多く出回っている文庫本サイズの半分以下，横本の場合も中本（現在のB6判）の三ツ切が多い。これは当時のこの手の辞書・辞典類に普通の様式である。以下刊行年を追って書誌的な面を中心に紹介して行くこととするが，印刷の都合上，書名の角書や本文の割注は〈 〉で括り，原文に付されている振り仮名は（ ）内に入れて示すか多く省略に従った。また，出版書肆の所在地の地番も繁雑を避けて殆ど省略した。ご容赦願いたい。なお，Mとあるのは明治の略号である。

【１】〈新撰〉萬通字類大全

A．明治７年10月，東京・同盟社蔵版。発行書肆：江嶋喜兵衛，東生亀次郎。小本１冊。表紙：濃縹色地紙に紗綾･鳳凰等空押し。題簽：子持ち枠付，角書〈漢語新選〉。封面：黄紙，飾り枠，縦三ツ割。「青木輔清編輯，荒木蕃閲，石村貞一校正／〈新撰畫引〉萬通字類大全／明治七年十月刊行　同盟社蔵」。柱刻：上方に「萬通字類大全」と出し，魚尾を挟んで丁付，「同盟社蔵」と続く。3（凡例）＋224丁。本文：画引き有界６行７段，209丁マデ。匡郭：三周子持ち枠，柱側オ上欄外小枠内に，陰刻または陽刻で画数を示す。附録は，名乗用字合性表・名乗略解の２種。終丁ウに「東京同／盟社蔵／版之記」の大型朱印アリ。

本書については，前掲松井，山田両氏によると，B．明治８年９月増訂再版本，C．同９年１月版権免許版がある。B，CはAとは異版で，西野古海の校閲，巻頭に中村正直の題辞（M8．初夏）が入り項目の配列も異なっている。すなわち，初版Aは総画引きで，その中を「偏アルト偏ナキトノ二類ニ區分シ」，前者を後半に後者を前半部分に配列してあるが，B，Cは偏の有無による区分を撤廃している。なお，松井氏は，Aが岩井久真編，明治４年５月刊の「大全漢語解[2)]」を承け成立している旨を指摘しておられる。ちなみにB，C〈増訂再版〉本については，

【２】「大全漢語字彙」B本巻末に

> 此書ハ，文選字引ニ漢語。熟語。外史・史畧・名乗・萬國人名地名。新聞・翻譯書類ヨリ，小學教則書類ノ文字ヲ加へ，一字ヲ知ラサル童蒙女子ニモ，直チニ引キ得ヘキ一種新法ノ早字引ニシテ，一書萬通ノ珍書也○尚又充分ニ増補改正シ，一層完全ノ書ヲ再版セリ

1）「佛語自在」，「九體伊呂波」，「國盡」――橋爪貫一の洋学入門書――（「中世近世辭書論攷　洋學・往来・歌語辭典　平成8．3」「漢和・漢語辞典の歴史」（「學鐙」89巻５号　平成4．5）

という広告が載る。

本書にはCの求版本Dもある。題簽・内題：「〈増訂再版〉萬通字類大全」，尾題・柱刻：「再版萬通字類」。封面：赤紙，子持ち枠縦三ツ割。「青木輔清纂輯／〈増訂再版〉萬通字類大全／東京書肆　水野氏蔵」。刊記：明治九年一月廿九日版権免許，明治廿四年七月廿八日再版　編輯人青木輔清　校閲人　西野古海　發行兼印刷人　東京・水野慶治郎。但し，版木はC本のそれを流用しているため，柱刻下方には「同盟舎蔵版」の五文字がそのまま残っている。

【2】〈音畫両引〉大全漢語字彙

A．明治8年2月，東京・同盟社蔵版。発行書房：江嶋喜兵衛，東生亀次郎。袖珍銅版1冊。表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。題簽：子持ち枠付，外題右横に「青木輔清纂輯」，下方に「完」と出す。封面：飾り枠付白紙。縦三ツ割り。「明治八年二月刊行／青木輔清纂輯／〈音畫両引〉大全漢語字彙／東京　同盟社蔵」。柱刻：イロハ分け表示と魚尾に続き，「大全漢語字彙」の書名，丁付，「同盟社蔵」の記載あり。全210丁：3（自叙）＋5（凡例）＋1（引用書目録略）＋2（目録）＋16（撿字篇）＋176（本文）＋4（附録）＋3（広告）。本文：有界7行4段。附録は助字之部（イロハ順）。匡郭：三周子持ち枠。明治八年第二月十有五日，青木東江誌，青木東園書の「自叙」は漢文体，赤色刷。凡例末5ウに「同盟舎／刊行記」の朱印あり。広告は青木輔清の「〈新選畫引〉萬通字類大全」，本書，「〈小學教諭〉民家童蒙解」「民間の喩」「〈小學教法〉童蒙諳誦本」，安井歡之助編「日本外史國史略字類」，岡田伴治訳「訓蒙天文圖解」の7点。各内容案内付。本書については

> 此書ハ，凡ソ世ニ行ハルヽ漢語書類ハ一モ漏スコトナク，猶ホ萬國人名地名等ノ訳語ヲ加ヘタル，音畫ノ両字引也，故ニ御布告・新聞紙・漢語書状ノ類ハ，字畫ヲ以テ引キ，飜訳・作文等ニハ，伊呂波順ニテ引クベキ，一書両通懐寶ノ極小字彙也

とある。また，「凡例」（M8．1）に

> 今此書ハ弊舎蔵板ノ新選畫引萬通字類大全ヲ本トシ，其他世ニ行ハルヽ漢語・熟語ノ字書，凡ソ三十本中ノ語ヲ悉ク抄録シ，加フルニ萬國ノ土地・人名ヲ以テシ，音畫イヅレニテモ急捜ノ便ニ供ス，故ニ御布告・新聞紙・漢語書状ノ類ハ字畫ヲ以テシ，又飜譯・作文等ニハ伊呂波引ニテ，随意ニ其語ヲ求ルニ便ナラシム

とあり，巻頭「引用書目録略」に「萬通字類大全」「日本外史國史略字類」以下「早見二重引」「雅俗幼學新書」までの23種の字解・字典類と「西國立志篇」を挙げ，「其他飜譯書類数本」としている。[3] 前掲松井利彦氏によれば，本書も岩井久真「大全漢語解」，外国の地名・人名については

2）横本　美濃半切1冊。大阪・大野木市兵衛，松村九兵衛，柳原喜兵衛刊。全219丁，頭書部首引。増補版に「大増補漢語解大全」（岩井真二郎編，M7．12，柳原喜兵衛刊）あり。

3）目録掲載の23種の字典・字解類は次の通り。参考までに（ ）内に刊行年次を付す。「萬通字類大全」，「日本外史國史略字類」「大全漢語解」，「増補布令字辨」（M5．冬）「漢語便覧」（M4．5）「新選字解」（M5．秋），「漢語二重字引」（漢語二重引）（M6．7），「日誌字解」（M2．5序），「新聞字引」↗

村田文夫編「音譯筌[4]」によっているという。なお，「撿字篇」に基づき試算すると，親字数は計2157。本書には，以下の異版，後修本がある。

B．明治９年１月増訂補刻版。同盟舎蔵版，編輯板主・青木輔清（東京濱町２丁目１番地）。後見返し「同盟舎蔵版」の文字の左に，《イ》「同盟舎蔵版賣捌書林」として丸屋善七，柳川梅治郎，石川治兵衛，江嶋喜兵衛，東生龜治郎の５名の東京書肆を掲げるものと，《ロ》「賣捌書林」として大阪・吉岡平助，東京・北畠茂兵衛，稲田佐兵衛，山中市兵衛，内田弥兵衛の５名を挙げるものとがある。後見返しにあるその形状よりして《ロ》のほうが後印と思われる。Ａの本文第127～128丁の丁付の乱れを訂正してある他，封面題（「〈音畫両引〉〈校正〉大全漢語字彙」），凡例等にＡと小異がある。広告は「〈増訂再版〉萬通字類大全」と書名を【１】Ｂのものに変えてあるほか，上記Ａに在った７点の広告の後に「姓氏字引」「〈銅版〉校刻小字典」「〈新撰銅版〉雅俗節用集」「〈大全漢語字彙・校刻小字典・雅俗節用集〉三書合本」「〈二重早引〉通俗名乗字解」の，いずれも青木輔清編の著作５点を，内容案内付で載せる。《イ》《ロ》共に広告末に明治７年12月４日出版免許，同９年　月　日版権免許の年記と編輯板主・青木輔清の名が住所付きで記されている。なお，このＢ本は後出【６】の「三書合本」に収載されている。

C．後出【８】「五書合本」に収載されているもの。明治11年２月大正３刻版。柱刻書名を「大正漢語字彙」と改め「撿字篇」の後に「省文」を２丁分付加し，附録「助字之部」を「〈附録〉助字通解」と改題しその前に索引を付け独立させる等の改変を行っている。また，「凡例」は明治11年１月編者再識のもので，Ａ，Ｂ本とは文面に小異がある。

D．明治22年９月求版，同12月再版。長岡・巣枝堂目黒十郎刊。上記Ｃに基づくもの。「凡例」「省文」や附録，柱刻の書名はＣのままだが，丁付下方の「同盟社蔵」の４文字を削る。封面：黄紙。刊記ウに「特約大賣捌所」として東京・大倉孫兵衛～松村孫吉の６名を出す。広告無し。

E．後出【９】「十書合本」に収載のもの。上記Ｄに基づくが，序は黒刷り，序・凡例の年記を削る。また，「引用書目録略」や単独の刊記も無い。扉：青木輔清著／大全漢語字彙／東京　嵩山堂蔵。桃色紙。凡例末に「日本／嵩山堂發兌記」の朱印がある。「〈附録〉助字通解」はＣと同じく別立て。

【３】校刻小字典

↘（M5．秋），「新令字類」（M4．春），「漢語字類」（M2．1），「漢語類苑大成」（M6．7），「律令字類」（M7．5），「増補新令字解」（M3），「新撰字類」（M3．7），「掌中漢語早引」，「新撰字引早見」（〈布令必用〉大増補新撰字引：M7．1），「布令字辨」（初篇：M1．11，初篇～五篇：同4．8）「令典熟字解」（令典熟語解：M2．2），「掌中早字引集」（〈布令日誌必用〉〈掌中〉早字引集一名御一新字引：M4．春），「洋語音譯筌」，「早見二重引」（節用早見二重引：嘉永5），「雅俗幼学新書」（安政2）。「西國立志篇」は明治４年初版。

4）　外題・封面：洋語音譯筌。美濃半切，横本１冊，73丁。明治５年２月天民舘蔵，京・勝村冶右衛門～東京・山城屋佐兵衛７名刊。イロハ順に地名・人名・雑稱を掲出，注を付す。英吉利（インギリス）～士景（スキン）。附録は亜爾波希多（アルハベット），西洋數字の２種。

A．明治８年10月18日版権免許，同盟舎蔵版。板主：安井歡之助。袖珍銅版１冊。後見返しにある「同盟舎蔵版賣捌書林」：東京･丸屋善七，柳川梅治郎，石川治兵衛，江嶋喜兵衛，東生龜治郎の５名は，【２】Ｂイと同じ。刊記ウに「同盟舎刊行記」の検印（朱印）あり。表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。題簽，封面：赤葡萄色刷。「〈銅版新鐫〉 挍刻小字典」。右方に「青木輔清纂輯」とあり。序：神武天皇即位紀元二千五百三十五年第十一月，醉花逸民識，東園隆（青木理中）書。紅色刷，漢文体，有界６行。緒言：明治八年初夏，東江主人清誌，東園書。漢字・カタカナ交じり文，有界５行。柱刻：魚尾，校刻小字典，丁付，同盟舎蔵。全250丁：3（序）＋3（緒言）＋4（部首目録）＋235（本文）＋4（同盟舎蔵版書目録）＋1（刊記）。本文：有界６行７段，画引き。「部首目録」に「文字ノ引キ方ハ，通例ノ畫引ノ如ク，部首ノ偏傍ニ就テ一畫，二畫ト数へ捜シ索ムベシ」とある。【２】Ｂ巻末広告では

〈銅版〉校刻小字典　極小美本一冊，世ニ字書多シト雖モ，皆大冊ニシテ一モ携帯ニ便利ナルモノナシ，偶アルモ字数僅ニシテ用ヲ達サズ，此書ハ字彙・玉篇中，唯不用ノコトノミヲ省キ縮テ銅面ニ刻シタル，紙入ノ内ニモ携フヘキ極小字典ニテ，懐中且夜学等ニハ最モ軽便ノ書ナリ

と宣伝されている。巻末の広告は【２】Ｂ本に準ずるが11点。本書の分が無い。また，「姓氏字引」に〈掌中〉の角書を付すほか，案文に小異がある。

このＡ版は，後に「〈新撰銅版〉雅俗節用集」（M9．4）「〈音畫両引〉大全漢語字彙」（M9．1増訂補刻）と三書合本になって出ているが，五書合本，十書合本に収められた異版もある。

B．後出【８】「五書合本」収載のもの。扉に「〈補訂〉校刻小字典之部」とあり，内題・尾題「〈補訂〉校刻小字典」。柱刻上部オにも「補訂」の２字を付す。刊記は「元版明治八年十月出版／明治十一年二月／編輯兼出版人／第一大區十三小區濱町二丁目一番地／青木輔清」とある。醉花逸民の序文の日付はＡのような皇紀ではなく「明治八年第十一月」と改めてある。2（序）＋2（緒言）＋4（部首目録）＋235＋1（刊記）。刊記ウに同盟舎検印（朱印）あり。広告（蔵版書目録）は無い。

C．後出【９】「十書合本」収載のもの。扉に「青木輔清著／校刻小字典／東京　嵩山堂蔵」とあり，内題・尾題・柱刻，丁数等はＢに同じ。序文・緒言の年月は削除してあり，単独の刊記，広告共に無し。

ちなみに，この「校刻小字典」の緒言中で

予頃日路傍ニ於テ小字彙ノ端紙若干ヲ得ル，何人ノ輯ル所ヲ知ラズト雖モ，元禄以前ノ書ニシテ，其今世ニ存セザルヲ憂ヒ，今大字書中ニ就テ音訓ノ正シキモノヲ撰ビ，其體裁ニ倣ヒ，大ヲ縮メテ小ト為シ，銅面ニ鐫テ，以テ専ラ携帯且燈前捜索ノ便ヲ謀リ，古人ノ意ヲ存セムトス

云々と「小字彙」に言及しているが，「小字彙」は（イ）貞享４（1687）年の「改正小字彙」，

（ロ）元禄元（1688）年の「改正續小字彙」等があり，いずれも本書と全く同じサイズの袖珍本である。今，手元に在る（ハ）元禄10（1697）年２月21日，大坂御堂前・毛利田庄太郎版によれば，内題：刪定増補小字彙，目録題：改正小字彙，尾題：寸珍小字彙。4（目録）＋202丁。部首別画引き７行７段。

Ⅲ　正字通，雅俗節用

【４】新刻正字通

A．明治10年10月題辞・跋刊（同９年１月27日版権免許）。同盟舎蔵版袖珍銅版１冊。編集人：長岡道謙，出版人：青木輔清（埼玉縣士族）。内題左下に「東京・長岡道謙纂輯，因幡・小林汎愛，東京・高野順同校」とある。本文終丁ウ尾題前に「青木輔清再校」，奥付オに細字草書体の跋文があり，末に「明治十年十月青木輔清誌」とある。また，後見返しに「同盟舎蔵版賣捌書林」として，東京・丸家善七，柳川梅治郎，石川治兵衛，江嶋喜兵衛，内田彌兵衛，東生龜治郎の６軒を挙げる。水鳥舎江島工山刻。表紙：黄色布目地紙に紗綾形模様空押し。封面：赤・緑２色刷，飾り枠内に右方から「長岡道謙纂輯／〈銅版〉新刻正字通／東京　同盟舎蔵」とある。外題にも「銅版」の角書あり。巻頭題辞（紀元二千五百三十七年，明治十年第十月十五日，東園畊夫書）の間に，「大清皇帝之圖」「大清皇后之圖」を緑と橙色の２色刷で出す。引：明治10年６月，東京・増田貢識，凡例：明治10年６月，編者識。凡例と目録の間に「同盟舎刊行記」の朱検印あり。全261丁：2（題辞・図）＋2（引）＋2（凡例）＋14（目録・検字）＋3（運筆・从古・古今通用）＋237＋1（奥付）。本文：６行７段，画引き。

なお，「凡例」に

> 古来，幼童ニハ，先四書五経ヨリ文選ヲ素讀セシム，故ニ文選字引等アツテ，大ニ其進學ヲ助ク，然レトモ學制一變シテヨリ，字書モ亦従テ其用ヲ缺クニ至レリ，故ニ今正字通四十八巻中ヨリ，方今緊要ナル文字ヲ多ク撰抜シ，音訓ヲ正シ，之ヲ銅面ニ鐫テ以テ夜學及ヒ携帯ノ便ヲ謀ル

とあり，その編纂意図が窺える。ちなみに，この中に出てくる「正字通」は12巻。明・萬暦43（1615）年序刊の「字彙」を補完するものとして編纂され，清初の康熙10（1671）年頃に初版が出，後の「康熙字典」に先立つものとして，我が国でも利用された。一方「文選字引」は日本出来の単字字典。元禄８（1695）年仲春中旬，京・風月堂の初刊。享保19（1734）年初秋版以下風月堂版を中心に諸版がある。[5] また，「學制一變」とは，明治５年のそれを指すと見てよいであろ

5）　初版は内題・尾題「授幼文選字引」，享保19年版以下は「音韻授幼文選字引」。文化11年，天保２年，同12年，弘化４年，安政２年，文久２年，明治５年，同７年の諸版があり，その版元は殆どが風月堂。書型は小本。宝暦５年，天明３年，寛政８年版は未見。また，「〈四書五経〉増補文選字引」と題する↗

う。

本書には，後印本，求版本が２種ある。一はＢ明治22年１月再版本で，封面書名に〈訂正再版〉の角書を付け，「萬卷樓藏」と書肆名を出すもの，一はＣ明治29年12月25日，東京・博文館大橋新太郎譲受再版本。封面は赤紙。飾り枠内に右から「長岡道謙纂輯／新刻正字通／東京　博文館藏版」とある。前付にあった題辞・図，運筆・古今通用等，巻末の青木輔清の跋文を削除し，末に「博文館發行辭書目録」（〈篆文詳註〉日本大玉篇～〈傳家寶典〉明治節用大全，計20点）を付す。ちなみに岩崎茂實編，明治12年２月刊の「新選正字通」袖珍本1冊は，本書Ａや元の「正字通」，「文選字引」を意識した単字字典である。

【５】〈新撰銅版〉雅俗節用集

Ａ．明治９年４月，東京・同盟舎藏版。袖珍銅版1冊。刊記によれば明治９年２月９日版権免許，編輯・版主：青木輔清。後見返し右方に「同盟舎藏版」とあり，界線を置いて左に，東京・丸屋善七，柳川梅治郎，石川治兵衛，江嶋喜兵衛，東生龜治郎の５名の「同盟舎藏版賣捌書林」を掲げる。これは【２】Ｂ《イ》，【３】Ａのそれと同じものである。なお，原装ながら，この記載部分の無いものもある。単なる脱落か後印かは不明である。表紙は，桑色無地紙のもの，黄色無地紙に紗綾形模様空押しのもの，黄布目地紙に紗綾形模様空押しのもの等がある。題簽・封面とも赤葡萄色刷。題簽：表紙左肩。「〈新撰銅版〉雅俗節用集　全」，右方に小文字で「青木輔清纂輯」と記す。封面：界線縦三ツ割り。書名・編者名は題簽に同じ。左方に「明治九年／四月新鐫／同盟舎藏」と出す。題言：紅色刷，磐渓老人。序：半嶺中根聞撰并書，漢文体。例言：明治九年初春，青木輔清識。

本文：有界８行，早引き・両点，12門部別け。１行16字，カタカナ・楷書体。匡郭：３周子持ち枠，各丁オ欄外柱側上部小枠内にイロハ分け標目。柱刻：魚尾，雅俗節用集，丁付，同盟舎藏。全234丁：２（題言）＋１（序）＋３（例言）＋２（12門區別目録・〔イロハ分け目録〕）＋210＋12（附録）＋４（同盟舎藏版書目録）。本文終丁ウに同盟舎朱検印。附録は「字音假名遣一覧」。広告（藏版書目録）は，「〈増訂再版〉萬通字類大全」「〈音畫両引〉大全漢語字彙」「〈銅版〉校刻小字典」「〈新選銅版〉雅俗節用集」「〈校刻小字典・大全漢語字彙・雅俗節用集〉三書合本」「〈二重早引〉通俗名乗字解」，安井歡之助「日本外史國史略字類」，「〈小學教諭〉民家童蒙解」，岡田伴治「訓蒙天文圖解」，「民間の喩」「〈小學教法〉童蒙諳誦本」「〈掌中〉姓氏字引」，三名同輯「日本外記」の13点。本書については

半紙八ツ折形　袖珍全一冊

此書ハ合類節用，幼學新書等ノ如ク，開化日用ノ語ヲ多ク集メ，更ニ外國ノ一部ヲ加ヘ，十

↘一群もあり，弘化５年版，明治２年，同７年仲秋版以下明治17年版に至る諸本がある。これも書型は小本。元禄８年版の凡例に「文選ノ外，近キ字并ニ訓，小補ス，童蒙何ノ書ニ用ルトモ可ナルベキ乎」とあるように，本書は「文選字引」の名を冠するものの「文選」読解専用のものではない。

二門ニ部分シ，漢語・雅言ヲ交ヘタル伊呂波引ニシテ，字数許多ナル携帯ニ便ナル，且附録ニハ字音ノ假名遣ヲ一目了然ニ示シタル，實ニ未曾有ノ珍書也

と宣伝する。また，「例言」に

古来節用集ナル者アリ，漸ク出テ漸ク委ク其世人ニ裨益アル，亦尠カラズ（中略）其書タルヤ巻帙浩瀚ニシテ勤仕・旅行ノ際等，其携帯ニ不便ナル，實ニ遺憾ト云フベシ，故ニ今，合類大節用其他有名ナル字書数巻ニ就テ，唯不用ノコトノミヲ省キ，方今日用ノ漢語・雅言ヲ交ヘ，更ニ外國ノ一部ヲ加ヘ，天地・人倫・艸木・言語ヨリ，外國ノ人名・地名ニ至ル迄，凡ソ十二門ニ區別シ，勉テ其語ヲ捜ルニ易カラシム，旦数巻ノ大冊ヲ縮メテ銅面ニ鐫，以テ携帯ノ便ヲ謀ル

とその編纂趣旨を述べる。文中に言う「合類大節用」とは，享保２（1717）年初刊の「和漢音釋書言字考節用集」，外題「〈増補〉合類大節用集」全10巻13冊のことで，幕末・明治初期に至るまで大いに行われた用字用語辞典である。[6)] 同書は普通の開版節用集が，イロハ分けを第一分類基準としその中を部門別にし平仮名・草書体漢字表記で語彙を配列してあるのに対し，部門別けをイロハ分けに優先させ，カタカナ･楷書体漢字表記で語彙を並べてある。すなわち部類･部門を以って合わせてある＝合類形式であるのが特色で，延宝８（1680）年仲秋刊の「合類節用集」に通ずる様式である。外題に「〈増補〉合類大節用集」を謳う所以もここにある。青木輔清の「雅俗節用集」は合類形式では無く普通の節用集の形式を採っているが，カタカナと楷書体の漢字表記という様式は，文中で言及している槙島昭武編の「〈増補〉合類大節用集」に範を仰いだものと見て間違いない。ちなみに明治期の節用集の多くは，江戸期のそれと同じく平仮名・草書体のものである。なお，附録を「字音假名遣一覧」にした理由は，「字書ハ假字ノ最モ正シキヲ要ス」という信念に基づくものである旨を，自身の経験に照らし「例言」中で説明している。

本書にも，後出の「三書合本」や「五書合本」「十書合本」に収められたものがある。Ｂは【６】【７】の「三書合本」収載のもので，Ａに同じ。但し，管見に入った【６】では，附録の「字音假名遣一覧」を本文より前に出している。本文終丁ウの同盟舎検印（朱印）はあるが，広告や本書自身の奥付は無い。Ｃは【８】「五書合本」にあるもの。Ａ，Ｂとは別版。すなわち，内題角書が〈再校銅版〉と変わり，柱刻オ上部に「再校」の２文字が入る。題辞･例言ともＡと小異あり。例言末を「明治十一年初春　青木輔清再識」と「十一」「再」の部分を切り取り･付け替えによって変更し，例言にＡには無かった振り仮名を付してある。広告や本書自身の奥付は無い。附録は本体と切り離し別立てにしている。Ｄは【９】「十書合本」にあるもの。Ｃを享けているが，題辞が赤色刷から黒に変わり，例言末は，「青木輔清再識」の６文字のみを残して年記を削ってある。附録はＣと同じく別立て。

【６】雅俗節用集・大全漢語字彙・校刻小字典　三書合本

〔明治９〕年，東京･同盟舎蔵版。銅版，袖珍洋革装，薄葉１冊。表紙背上部に臙脂色の皮革を

貼付し，金文字，右横書き（縦書きのものもあり）で３書の題名，下方に「青木輔清纂輯」の金文字入り黒革を貼る。見返し：マーブル。【５】Ａ巻末の広告に「薄葉摺布表紙／帙入全１冊」とあるので，和装本もあるはずであるが未見。内容は

①「〈新撰銅版〉雅俗節用集」。一本は，巻頭に附録の「字音假名遣一覧」を置く。封面は【５】Ａと同じもの。終丁ウに同盟舎朱検印あり。②「〈音畫両引〉大全漢語字彙」。前出【２】Ｂ本に同じ。Ｂ本の広告の後に「同盟舎蔵版書目録」を載せるが，これは【５】Ａに付されたものと同じである。③「校刻小字典」。【３】Ａ本に同じ

の３種。

【７】新刻正字通・大日本地名筌・雅俗節用集　三書合本

明治10年12月24日，東京・萬巻楼袋屋（東生）龜治郎刊，袖珍銅版洋革装薄葉１冊。表紙背上部に，【６】と同じように臙脂色の皮革を貼付し右横書き・金文字で３書の題名（「新刻正字通」のみ「銅版」の名を冠する），下方に「書肆萬巻楼製」の金文字入り黒革を貼る。見返し：マーブル。扉オ：金茶色の飾り枠を３ツに割り，右に「長岡道謙／市野嗣郎／青木輔清編輯新製洋綴發兌」，中央に「新刻正字通／大日本地名筌／雅俗節用集／三書合本」と出し，左に「東京府下／書籍問屋／東生萬巻楼〈印：ふくろや〉」と記す。扉ウ：右横書き。上方から「三書合本御届／明治十年十二月廿四日／皇漢書籍賣捌所／武蔵東京／大傳馬町三丁目／袋屋龜治郎」。内容は

①　長岡道謙纂輯，小林汎愛・高野順同校，青木輔清再校「新刻正字通」【４】Ａに同じ。細字草書体の跋文は無く，後見返しにあった６名の賣捌書林は，そのままこの合本の最終丁に移動させてある。②「〈皇國一覧〉大日本地名筌」（内題）。市野嗣郎編纂，青木輔清校正。扉：飾り枠内に右から「市野嗣郎纂輯／〈皇國一覧〉大日本地名筌　附物産辨／東京書肆萬巻樓蔵」とあり。序：明治９年７月久保田精一，凡例：明治９年夏　編者誌。３（序）＋５（凡例・目録）＋225丁。図入り。末に「近國有名之地（樺太，魯西亜本國，支那，高麗）」「諸里程大略」「外國諸港里程大略」を付す。③「〈新撰銅版〉雅俗節用集」。【５】Ａに同じ。

の３種。

Ⅳ　五書合本，十書字典

既に前章で三書合本の類を見たが，明治期の字引・字典類には，現代の電子辞書程ではないが，二書，三書，五書，十書といった合本形式を採るものが散見される。青木輔清のものは十書のそれを除くと早い時期のものに属する。ほぼ同時期のものとしては，森琴石編「〈懐中便利〉五書合本」

6）　刊年が明らかなものとしては，享保版の後，明和３年版，安政３年版，万延元年版，文久元年版等があり，半紙本13冊を２冊にした薄様刷り本や，明治刷りもある。

袖珍銅版横本１冊（M12．１版権免許，大阪・小川新助・岡田藤三郎刊[7]），大舘利一・安田敬斎編「懐中三書便利」同１冊（M13．1刊，大阪・明治舎蔵版[8]）などがあり，後のものでは五書に荒川義泰編「〈新撰活用〉五書大字典」（明治27年３月，青木嵩山堂版[9]），十書に辭書刊行会編「十冊合本大辭典」（昭和10．９，大阪・秀文社版[10]）等がある。ちなみに，江戸時代の節用集類では，元禄６（1693）年３月刊「〈頭書繪鈔〉大廣益節用集〈真草両點〉」が漢和辞典である「増補倭玉篇」を搭載し，寛政８（1796）年９月刊の「字貫節用集」がやはり上部に「増補画引玉篇」を合わせている例があるが，稀である。それに対し往来物では，「古状揃」をはじめ合書型の往来は枚挙に暇が無い。

【８】五書合本

袖珍，洋革裝銅版薄葉刷１冊。様式は【６】【７】と同じで，表紙背上部に「五書合本」，下部に「青木輔清編輯」と金文字である。扉に「青木輔清編輯／五書合本／明治十一年・増訂補刻同盟舎出版」と記す。収載書には，「……之部」と記した水色あるいは白の中厚紙の中扉をそれぞれ付す。①にあるべき東京・丸屋善七～江嶋伊兵衛の６名の同盟舎蔵版賣捌書林を移動させて，全体の奥付として流用している。

①「〈補訂〉校刻小字典」M11．2版。書誌事項は【３】B参照。②「〈音畫両引〉大正漢語字彙」M11．2大正３刻版。書誌事項は【２】C参照。③「〈附録〉助字通解」（②の附録を独立させたもの）。④「〈再校銅版〉雅俗節用集」M11初春版。【５】C参照。

⑤「音訓假名遣」。これはM10．12．1出版御届，青木輔清編・刊の同書[11]のうち「音訓假名遣」の部分と，④「〈再校銅版〉雅俗節用集」の附録「字音假名遣」を合わせて「音訓假名遣之部」として合本にしたもの。丁数：2（緒言）＋30（音訓假名遣）＋12（字音假名遣）。緒言に

余，曩ニ，黒澤翁ノ遺稿ヲ元トシ，本居大人ノ著書其他，尚古假字格・今古假字遣・古言梯・類字假字遣等ヲ参考シ，假字ノ最モ紛誤シ易キモノヲ類集シテ几右ニ置キ，急索

7）M12．1版権免許，大阪・小川新助，岡田藤三郎刊。「大日本道中記」「公私日用文章」「新撰漢語字引」「〈懐中便利〉いろは引節用集」「〈懐中便利〉新撰畫引玉篇」の５点。

8）「〈萬民必携〉懐中日用便利」「〈郡區改正願届証券〉公私便利」「〈新撰画入〉便利以呂波字引」の３点。

9）小本銅版１冊。花房柳條編「〈いろは節用〉明治辭典」同「音訓假名遣ひ」，荒川義泰編「〈實字虚字〉作文字典」，梅崖山本憲編「〈漢語分註〉明治正字典」（中扉：〈熟語類衆〉新撰明治字典），荒川義泰編「〈熟字以呂波引〉漢語大字典」の５点を収載。

10）A6判活版箱入り１冊。「法律百科大辭典」「常用漢和大辭典」「いろは引大辭典」「現代新語大辭典」「手紙百科大辭典」「字くづし大辭典」「英語獨習大辭典」「文章百科大辭典」「五分間演説辭典」「社交常識辭典」の10点を収録。

11）袖珍銅版１冊。表紙：黄色地紙に紗綾形模様空押し。題簽：桃色紙，子持ち枠付。「青木輔清輯／音訓假名遣」。封面：桃色紙，飾り枠付，縦３ツ割り。編者・書名の後に「〈明治十年十一月新鐫〉同盟舎出版」とあり。はじめの30丁が「音訓假名遣」，後の12丁が「附録字音假名遣一覧」。末４丁に「同盟舎蔵版書目録」と刊記。刊記：明治十年十二月一日出版御届　編輯出版人・青木輔清。蔵版書目は「〈増訂再版〉萬通字類大全」～「紙入節用」までの17点。本書や「〈銅版最小〉掌中玉篇」を含む。

ノ便ニ供セリ

云々とある。列記されている仮名遣書は，寛文６（1666）年初版，明和７（1770）年再版の「類字假字遣」をはじめ，宣長の「字音假字用格」を含めて江戸時代中後期に流布したものばかりであるが，繁雑となることを避けそれぞれの紹介は省略する。

【９】〈新撰活用〉十書字典

青木輔清の著作五点と藤堂卓の著作５点の合冊。奥付の著者名が藤堂卓になっているものＡと，年記に再版の文字が付き著者名が青木輔清となっているものＢとの２版がある。元版と比べ版面に若干疲れが認められる個所もあるが，Ａ，Ｂ両者の刷の状態に殆ど差は無く，先後は付け難い。

Ａ．藤堂卓著，明治33年１月30日発行本。袖珍銅版２冊１帙。濃紺布貼り表紙。題簽：表紙左肩，単枠付白紙。「新撰活用〉十書字典　上（下）」。封面：桃色紙，飾り枠付，縦三ツ割り。右から「藤堂卓編輯／〈新撰活用〉十書字典／東京　嵩山堂蔵」。刊記に年記のほか，編輯者藤堂卓，發行兼印刷者：大阪・青木恒三郎，發行者として大阪・東京の青木嵩山堂を住所・電話番号付で挙げる。巻頭に「経緯東西網羅新古」という大槻磐渓の題言があるが，これは本来②の「〈新撰銅版〉雅俗節用集」用のもので，赤字刷であったものを黒字に変え，柱刻の書名「雅俗節用集」を削って冒頭に出し，あたかも本書の為に寄せられたものである様に見せかけ権威付けを図ったものである。なお，各字典類の前に中扉があり著者名，角書無しの書名，蔵版者名（東京嵩山堂）を記す。伝本によって紅または桃色紙になっている。それぞれの字典類に独自の刊記は無い。

《上》①「〈補訂〉校刻小字典」，青木輔清纂輯。【３】Ｂによる。②「〈再校銅版〉雅俗節用集」，青木輔清纂輯。【５】Ｃによる。但し例言の年記を削り，附録は別立てにして後出の③にしてある。③中扉書名：「字音假名字典」。内題：「音訓假名遣／青木輔清輯」「附録字音假名遣一覧」。【８】の「音訓假名遣」と【５】Ｃの附録とによるが，【８】の緒言に在った年記は削ってある。なお，単独版の「音訓假名遣」（M10．12）によった可能性も考えられる。

《下》④「〈音畫両引〉大全漢語字彙」，青木輔清纂輯。【２】Ｄによるか。但し「自叙」を赤字刷から黒字に替え，年記と共に「青木東江誌」の５文字および印記（東江）を一旦削り，新たに上記５文字と印を模刻し，年記が無くなった分１行前に詰めている。また，凡例末ウに「日本嵩山堂發兌記」の朱印を捺し，「引用書目録略」は削除，これまでカタカナ表記であった「引用目録」のイロハ分けを平仮名表記に改めている。

なお，附録は次の⑤として別立てにしてある。⑤中扉題：「新撰助字通解」，内題：「〈附録〉助字通解／青木輔清輯」。④の附録を独立させたもの。柱刻の「大正漢語字彙」の６文字はそのまま残存している。全10丁。

以下⑥～⑩は藤堂卓の編。⑥中扉・柱刻・尾題：「日本地名字典」。内題ナシ。上下２段組，

イロハ順。48丁。いがのくに（伊賀國）～すゐしやうだけ（水晶嶽）。「伊賀國：東海道の一國」「東京：日本の首都」「東海道：日本の九道の一。十五國から成る」という一行情報が殆ど。「那智瀑：きいのくに，なちさんの中。一の瀑高さ八百四十尺，幅百０八尺，二の瀑高さ百０八尺，幅十八尺，三の瀑高さ七十八尺，幅十八尺。びんごのくに，ぬかごほり。高さ六百五十尺，幅六尺」等というのは稀で，有用性に疑問がある。その点，次の⑦も同様である。

⑦中扉：「外國地名字典」。内題・柱刻・尾題：「支那地名字典」，「西洋地名字典」，「西洋地名字典附録」。丁付は⑥からの通しで四十九～七十六。全28丁。上下２段組，イロハ順。附録は地球上水陸の面積，著名高山，各國領土人口など。⑧中扉・内題・尾題：「日本人名字典」。11丁。上下２段組，イロハ順。いはさ，またべゑ（岩佐又兵衛）～すゑ，はるかた（陶晴賢）

⑨中扉：「外國人名字典」。内題・柱刻・尾題：「支那人名字典」，「西洋人名字典」。丁付は⑧からの通し。十二～二十三，全12丁。上下２段組，イロハ順。いゐん（伊尹）～すゐでぬぼるぐ（SWEDEBORG〈ママ〉）。⑩中扉・内題・柱刻・尾題：「故事熟語字典」。145丁。い・一人當千～す・翠巒。

B．青木輔清著，明治33年１月30日再版本。封面はＡと同じ「藤堂卓編輯」のものであるが，刊記部分にＡと異同がある。すなわち年記部分が「明治三十三年一月二十日再版印刷／明治三十三年一月三十日再版發行」となっており，Ａの「編輯者　藤堂卓」の部分が「著者　青木輔清」，發行兼印刷者の青木恒三郎の住所が，大阪市ではなく東京市のものになっている。Ａとの先後は未詳である。収載されている10種自体に変動は無いが，中扉に一部異なりがある。すなわち，Ａではすべて桃色紙に飾り枠で統一されているが，本書Ｂでは，①の「校刻小字典」，②「雅俗節用集」，④「大全漢語字彙」，⑩「故事熟語字典」の４点のそれが赤色紙に子持ち枠となっており，他の６点と合っていない。

Ⅴ　紙入節用，掌中玉篇，ダイヤモンド

【11】〈要語日用便〉紙入節用

A．明治10年４月30日，東京・正榮堂内田弥兵衛發兌。編輯・出版人：青木輔清。袖珍横本銅版１冊。表紙：黄色無地紙。題簽：紅色紙，子持ち枠付。書名右に「青木輔清編」とあり。封面：紅色紙，飾り枠付。右方に「青木輔清編」左方に「〈版権免許〉正榮堂發兌（朱印：正榮堂内田氏）」と縦書き。中央部に角書付で書名を右横書き。内題：「〈要語日用便〉紙入節用」。次行に「青木輔清編」とあり。尾題：「節用終」。刊記：後見返し貼付の奥付に，「明治十年一月卅一日版権免許／同四月三十日出版　編輯・出版人青木輔清（住所略）」とあり，界線を置いて左に「東京横山町二丁目拾六番地／發兌内田弥兵衛」，さらに界線を置いて左に「諸國賣捌書林」として，

水戸・新報義社～東京・山中市兵衛の16名を上下２段に列記する。柱刻：白口。オ側に「節用」，いろは分け，丁付の表示。１（題辞・伊呂波引目録）＋77丁。匡郭：３周子持ち枠。本文：有界13行，１行７字，早引方式。い〔一〕伊．意．膽～す八，寸善尺魔．ずるずるべつたり（行々為別）．すんいんをおしむ（惜寸陰）。書名は，題辞に「懐宝」とあり袋右下にも「懐宝便要」とあるように，紙入に入れて持ち運びが出来るような，小型で軽便な節用集という意味である。

B．明治14年５月再版本。Ａとは異版。表紙：黄紙。題簽・封面はＡと同じく紅色紙であるが，共に様式が異なる。題辞も別のものに替えてある。内題の下方に「再版」とあり，本文は新刻。刊記：「明治十年一月三十一日版権免許／同十四年五月二日再版御届／編輯出版　青木輔清（朱印：同盟舎印）／發兌　内田弥兵衛（朱印：正榮堂内田氏）」。匡郭：３周単辺。柱刻オ上部に「校訂」の２字が入る。

【12】〔〈 〉〕三用便

明治10年８月，東京・正榮堂發兌。袖珍銅版薄葉刷横本１冊。金茶色布貼表紙。題簽・封面：紅色紙。封面：右から「青木輔清編／〈願届諸証文日用諸規則〉懐中日用便／〈日用諸規則重寳記附〉紙入書状用便／〈要語日用便〉紙入節用／版權免許／正榮堂發兌」とあり。いずれも青木輔清編の生活小百科，辞典３種を収載する。刊記は②の「紙入書状用便」のものを終丁に移し，「正榮堂發賣書目（〈願届諸証（ママ）日用諸規則〉懐中日用便～初學須知人體問答22点）」と陸前仙臺・管原屋安兵エ～品川金十郎支店までの32軒の書肆を挙げる。

①「〈改正増補〉懐中日用便」。1＋2（書中概目）＋50＋1（広告）丁。「書中概目」によれば「御祭日並ニ略解」～「驛逓局預け金手続」までの68条。広告は本書～訓蒙軌範字解の28点。②「〈日用諸規則重寳記附〉紙入書状用便」。4＋40丁。前述の如く，本来在った広告･刊記を本書の末に移動させ，全体のそれに流用している。目録によれば「禮服着用日」～「脇付返事の類」の74条。③「〈要語日用便〉紙入節用」。1＋77丁。【11】Ａに同じ。但し同書の刊記は削る。

の３種を収載。

【13】懐中五用便

A．明治13年11月，東京・内田彌兵衛發兌。袖珍銅版薄葉刷横本１冊。金茶色布貼表紙。題簽・封面：紅色紙。封面：飾り枠・巻紙風図案の中に「懐中五用便」と大きく題名を出し，右方に「懐中智慧袋」～「帋入節用」の5種の収録著作名を掲げる。すべて青木輔清の編著である。全体の刊記は，⑤の「紙入節用」の後に，「合本添題御届／明治十三年十一月廿五日／編輯兼出版人　青木輔清／發兌人　内田彌兵衛」とある。また，その次に丁を改めて「〈同盟舎正榮堂〉出版書目定價表」が３丁分あり，「〈漢文〉外史擘要」以下「〈官民懐中〉萬用便」に至る93点の書目を挙げる。ちなみに本書は80戔，【12】は50戔とある。そして次に東京･北畠茂兵衛～甲州山梨・東浦榮次郎までの84軒の「諸國賣捌所」を２丁半に亘り列挙する。なお，各著作の前には，

淡桃色の中扉があり題名が記されている。所載の5書は次の通り。

①「〈公私諸則〉懐中智慧袋」。M12．9序。2（序・凡例）＋6（書中目録）＋108丁。目録によれば，尊上皇族～驛逓局豫（ママ）ケ金并受取手續までの103条と，諸國道中里程記74項。②「〈懐中〉農家日用便」。M13．1凡例。2（題辞・凡例）＋4（書中目録）＋68丁。刊記あり。M13．1．22版権免許，編輯出版・青木輔清，發賣・内田彌兵衛。また，「諸國賣捌書肆」として，日向延岡・遠山貞一～上野中ノ条・小池政七までの34名を列挙する。内容は，目録によると，萬民須知之部，暦日耕植之部，納税諸規則の部，地所諸規則の部，借貸用の部，農家用願届諸証の部，土地に係る旧称名目の7部に分かれ，都合95条の情報を収載している。③「〈日用諸規則重寶記附〉懐中書状用便」。M10．6の単独版によるか。4＋40丁。【12】の②に同じ。④「〈改正〉徴兵令解釋」。青木輔清和解とあり。1＋52丁。刊記があり，明治13年11月9日版権免許，解釋出版・青木輔清と記す。8章および追加6部に分けて記述。⑤「〈要語日用便〉紙入節用」。1＋77丁。【11】Aに同じ。

B.〔明治15〕年，東京・内田彌兵衛發兌版。書型・装丁：Aに同じ。中扉は白紙に書名。末に「合本添題御届」としてAと同じ明治13年9月のものがあるが，③の刊記により本書は同15年3月以降の發兌と思われる。

すなわち②，④はAと同じであるが，①は「〈公私諸則〉懐中智慧袋〈増補再版〉」となっており，末に刊記があって「版権免許　明治十二年七月三十日，再版御届　明治十四年八月十五日」と年記があり，「編輯出版　青木輔清，發賣　内田弥兵衛」と記す。また，凡例は明治14年5月編者再識のもの。106条＋74項。2＋6＋114丁。③は内題「紙入書状用便」。3＋41丁，87条。奥に刊記があり，「明治十年六月六日版権免許／仝十五年三月九日再版御届／編輯人　青木輔清，出版人　内田彌兵衛」とある。そして⑤は，内題に「〈要語日用便〉紙入節用　再版」とあり，柱刻にも「校訂」とあって，【11】B明治14年5月版に同じであることが判る。なお，巻末にAと同じく「〈同盟舎正榮堂〉出版書目定價表」があるが，その最後「〈官民懐中〉萬用便」の後に9点ほど付け加え，計102点になっている。

【14】〈銅版最小〉掌中玉篇

明治10年5月3日版権免許，東京・同盟舎出版。洋装袖珍銅版1冊。洋紙両面刷。表紙：青緑色クロス装，背革：小豆色。見返し：マーブル。背に金文字で「掌中玉篇」と飾り模様と共に縦に捺す。扉：飾り枠を縦に3ツ割りにし，右から「青木輔清編輯　（懐中）／〈銅版最小〉掌中玉篇／〈版權免許〉同盟舎出版」と出す。内題：扉題に同じ，尾題：「掌中玉篇大尾」。刊記：明治十年五月三日版權免許／編輯出版人　青木輔清／博真堂岡田氏蔵版。「撿印」とある下に「同盟舎印」の正方朱印，年記の下に「定價金五十銭」の朱印あり。ちなみに【13】巻末の定價表では，「小本両面刷洋綴／價四十五戔」，後出の「〈畫引〉日本ダイヤモンド」は「極小本一冊／價五十戔」とある。奥付ウに「同盟舎出版賣捌並發行書肆」として，上段に西京・丸家善吉～東京・江

嶋伊兵衛までの６名の発行書肆，下段に東京・江嶋喜兵衛～内田彌兵衛の６名の売捌書肆を載せる。ノンブルはノド側にある。本文：畫引，有界７行８段。2＋366＋２頁。巻頭に陰刻の「小引」（明治10年７月，岳陽・増田貢），薄紙１葉を挿んで次に洋髪・和服男性の淡彩の肖像画があるが，あるいは輔清のものか。

書名角書に「最小」とあるが，本書は青木輔清の辞典類に多い袖珍本よりさらに小さく，いわゆる名詞判＝B8サイズに相当する。輔清は他に後続の【15】と，「〈英和〉懐中字典　一名同盟舎辭書」（M17．9）で，この判型を採用している。本書の緒言（明治10年第２月）で輔清自身

> 英版ニ〔ダイヤモンド〕ト称スル，最小ノ活字ヲ以テ出版セル字典アリ，是字書中ノ最モ軽便ナル者ニシテ，萬國擧テ貴重セザル者ナシ，故ニ余嚮ニ之ヲ譯シ世ニ公ニス[12]（中略）今復タ玉篇及ヒ字典中唯不用ノ字ノミ除キ，大ニ音訓ヲ正シ，銅版ヲ以テ勉テ細小ニ刻成シ，方形ヲ英版ノ原本ニ模シ，又我國ノ〔ダイヤモンド〕タラントス，聞ク，一粒ノ〔ダイヤモンド〕石ハ，ヨク一國ヲ贖フノ價アリト，此書モ亦，一掌中ノ小冊子ト雖トモ，其ヨク一擔書ノ用ヲ為スニ至ラバ，實ニ編者ノ大幸ナリ

と述べているのは参考になる。ちなみに「音訓假名遣」（M10．11）巻末の広告「同盟舎蔵版書目録」でも

> 此書ハ萬國ニテ貴重セル（ダイアモンド）ト称スル，極小字典ノ形ニ倣ヒ，漢音・呉音ヲ區別シ，音訓トモ假名遣ヲ正タル軽便無類ノ畫引也

と宣伝している。

【15】〈紙入〉開化節用・日本ダイヤモンド

明治33年２月７日再版，東京・井上勝五朗刊，袖珍銅版洋紙両面刷１套。帙包み装。この装丁は，明治期から昭和前期にかけて稀に見られる。本書では，新橋色（伝本により灰青色）クロス装帙のオモテ上部に「日本ダイヤモンド／開化節用」と金または黒文字で大きく書名を捺し，「薫志堂版」の文字と文机・羽箒立ての図を押してある。判型は【14】と同じくB8で，刊記はそれぞれの末にある。

> ①「〈紙入〉開化節用」。扉：飾り枠縦３ツ割り。中央に書名を出し，右に「青木輔清輯」左に「東京　薫志堂」と記す。3（凡例・類分〈ママ〉門部目録・伊呂波引目録）＋300頁。奥付301頁に刊記：明治三十年二月三日印刷／明治三十年二月七日再版／編輯人　青木輔清／發行人井上勝五朗，定價金四拾銭。本文は早引きと部類分けを併用。門部は天地・時候～言語・数量の10門。イロハ分けの門標にローマ字表記を添える。本文：カタカナ・楷書体漢字，両點，有界７行。い・I：㊅夷，井～すス・SU，ZU：㊇スクヒアハレム（救恤），寸善尺魔。「凡例」（青木輔清誌）に

12）「〈英和〉掌中字典」。M6．9，有馬私学校蔵版。判型は他の袖珍本並み。

古来節用集ト称スル者数種アリト雖トモ，言語ノ雅俗，萬物ノ称呼等，時ニ従ヒテ変換ナキニ非ズ，故ニ今現時専用ノ漢語・雅言ヨリ，天地・人倫・魚蟲・艸木等ノ名字ヲ集メ，是ヲ十門ニ分チ，勉テ捜索ニ易ク携帯ニ便ナラシム

とあり，その編纂意図が窺える。

②「〈畫引〉日本ダイヤモンド」。①と同じく明治30年2月7日再版本。奥付の様式は小異あり，出版人・井上の名が「勝五郎」になっている。定價金五十銭。本書は【14】の修訂・改版本で，緒言の字句に小異があるほか，巻頭の「畫引目録」の終末部分の文辞を改め，撿字を16頁分付加してある。

Ⅵ　おわりに

さて，これまで15点ほど青木輔清の編にかかる字引・字典類を紹介して来た。好きでやっていることとは言え，例えば【12】や【13】のように，縦5.7㎝横12.7㎝の小型本で薄葉という披見に困難を覚えるものや，【14】や【15】のように9.1㎝×5.5㎝といった小型本のうえ，製本の関係で開きにくく，開けると背がこわれてしまうようなものを扱ってくると，調査している当人ですら聊かうんざりして来る。しかし，かつて玉置氏にもその一端を開陳したことがあるが，江戸期は勿論，明治期の通俗字引類刊行の様相は繁雑を極め，実物を検しない限りは，安易な報告は出来ない状況にある。それを思い合わせると，もう時間が無い。まさに150年とやらにうつつを抜かしている場合ではない。学問研究においては地道な資料蒐集と，それに基づく比較検討が重要であることは言うまでもない。ささやかであっても，小生には手近な文献を説明する責任がある。力む訳ではないが，それが辞書史，書誌学的研究を標榜している者の義務，社会に対する責任である。本稿冒頭に触れた如く，手近な資料によっただけであるので，遺漏・誤脱は多々あろうかと思われる。何卒御寛恕賜りたい。小生はこれからも身丈に合った経営を続けて行く所存。玉置さん，今暫くの御猶予を。

ところで，青木輔清編の辞書･字典類で紹介すべきものは，まだまだ多い。例えば「〈英和〉掌中字典」(M6．9)「〈英和〉懐中字典」(M17．9) といった英学関係のもの，「〈掌中〉姓氏字引」(M8．4)「〈二重早引〉通俗名乗字解」(M18．10) といった名乗字典類，「信濃地誌略字引」(M13．3)「〈頭書圖解〉十八史略明細字引」(M15．3)「博物階梯字引」(M15．5) といった教科書・啓蒙書に連なるたぐい，それに「作文字類」「紀事雅文字引」「早引節用集」を頭書に戴く「〈海内無雙〉東京文證大全」(M14．12) といった往来物・作文指南書等である。諸般の事情からそれらについての報告は又の機会に譲り，残った字典の中で多少の流布を見た「廣益中字典」を取り上げて，拙稿を閉じることとしたい。

【16】廣益中字典

A．明治11年10月10日，東京・同盟舎蔵版。小本洋装背革洋紙両面刷，銅版１冊。背に金文字で「廣益中字典」「青木輔清編輯」と右横書き。扉・序は赤色飾り枠付。扉：縦三つ割り。中央に大きく書名を出し，右に「青木輔清輯（版権免許）」，左に「〈明治十一年八月新鐫〉同盟舎蔵（朱印：同盟舎印）」と記す。奥付：オに「明治十年十二月廿五日版権免許／同十一年十月十日出版／同盟舎蔵版（朱検印：同盟舎印）／〈編輯出版〉青木輔清」，ウに東京・丸屋善七～内田彌兵衛の７軒，丸善支店については西京以下４ヶ所の發賣書肆を列記する。終丁ウ本文末・尾題前に「同盟舎彫刻局　森明・榎本勝・奥村信順合刻」とある。これはB，C版では削られている。また，第８頁序ウには「版権免許〈青木内田〉同版」の朱印あり。ノンブルは小口側下部にあるが，「丁」の字が付けられている。13（叙・序・小引・凡例）＋17（索引・撿字）＋806頁＋奥付。本文：部首・画引，有界８行，挿画入り。凡例（M11．8，青木輔清）に

> 近世字書ノ刊行スル者，数百種ニ下ラス，實ニ盛ナリト云ヘシ，雖然或ハ剞劂ノ粗漏ナル，或ハ區區タル小冊子ニシテ，真ニ其用ニ供スヘキ者稀ナリ，舊版ノ字彙・字典・正字通ノ如キニ至リテハ，實ニ善盡セリト雖モ，大部ニシテ坐右翻閲ニ不便ナルノミナラス，其書中，或ハ唐本ノ事ノミ掲ルヲ以テ，多クハ不用ニ属シ，却テ今日有用ノ事ヲ缺ク者，亦尠カラス，故ニ今其書中ニ就テ，不用ノ事ヲ省キ，代ルニ今日有用ノ事ヲ加ヘ，之ヲ縮小シテ銅面ニ刻シ，勉テ小冊ト為ス

とあり，字書としての軽便さ，実用性をここでも訴えている。なお，冒頭に清・光緒４（1878＝明治11）年姚江沈文熒の叙があるが，B，C版では削除されている。

B．明治23年11月10日再版本。小本洋装ボール表紙銅版３冊。表紙の書名のある部分は，上之巻が金茶色，中が黒，下が茶色になっている。それぞれに部首索引を刷り込み，分巻は（上）１画・一～４画の戈まで，（中）４画の戸～６画の聿，（下）６画の肉～17画・龠部。表紙・扉の書名に「挿画（畫）」の角書を付す。中，下冊には内題無し。刊記：「明治二十三年十一月五日印刷／仝年仝月十日再版／編者　青木輔清／發行兼印刷者　東京・長島恭三郎／發賣所　東京・文昌堂，埼玉・盛化堂」。同ウに東京・榊原友吉～函館・魁文社に至る22名の書肆を上下２段に載せる。また，表紙に「長島蔵版」，扉に「版権所有･長嶋書房」とある。（上）30＋198頁，（中）302頁，（下）306＋１頁。扉・序までは紅色枠付。但し光緒４年の叙は枠だけを残し空欄になっており，序や小引・凡例にあった年記はすべて削ってある。

C．明治32年12月13日三版。濃紺布貼表紙，和装小本銅版３冊。題簽：子持ち枠付，「〈挿畫〉廣益中字典　青木輔清輯　上（中・下）」。各冊に扉を付す。黒の飾り枠を縦に３ツ割り。中央に「廣益中字典〈上（中，下）〉」の書名，右に「青木輔清輯（赤色印形：版権所有）」左に「東京・松榮堂蔵版（赤色印形：大草之章）」。刊記：「明治三十二年十二月十一日三版印刷／明治三十二年十二月十三日三版發行（正價金壹円五拾銭）／編者　青木輔清／（版権所有）發行兼印刷者　東

京・大草常章／發行元　東京・松榮堂書店」。内題：「廣益中字典上巻（中巻，下巻）」。分巻は（上）30＋237頁，１画・一～４画・斗部。（中）321頁，４画・斤部～６画・艸部。（下）250頁＋奥付。６画・虍部～17画・龠部。中・下巻巻頭に内題・編者名等各２行分あり。なお，山田氏目録によれば，明治35年５月の４版Ｄがある由であるが，未見。

玉置さん，玉置紀夫さん。貴兄と初めてことばを交わしたのは何時のことだったか。たぶん，三田の情報通，三田裏情報センター所長の称号を持つ貴殿の，張り巡らした網に罹ってしまったのが，その始まりだったと思う。ご夫婦共々能楽を嗜んでおられた貴兄は，いつも背筋をぴんと伸ばし，図書館と研究室とを速足で往還し，三田山上を巡回しておられた。そして，さびと張りのある声と，にこやかな笑顔と，時にこちらを見透かすかのような鋭い目つきで，小生と接してくれた。お互いにジャンルは異なるがクラシック好きで，また，慶應義塾の現状を愁え行く末を案じていたこともあって，話が合い，あれこれと悩み多き小生は，しばしば貴殿の研究室を訪ねグチをこぼしたものだった。

玉置さん。心配していた通り，今，学校は，変な方向に進みつつある。空疎なキャッチフレーズが横行する中，学問研究の根幹を揺るがし，空洞化に向かわせる変革が進行しつつある。これについて言い出すと，きりが無いので止めるが，いずれは編集長格にと思って，貴兄に委員の就任をお願いし快諾を得た「慶應義塾150年史」。あれももう無い。それにしても３月中旬，訪問研究員スメサーストさんの受け入れ担当を小生がお引き受けする件で，三田でお目にかかったのが最後となってしまった。玉置さん。貴殿はそうなることを覚悟しておられたのだろうか？　お別れに来られたのであろうか？　ほんの少しほっそりとしてはおられたが，何時ものとおり，やや早口でてきぱきと用件を済まされ，背筋をピンと，そして速足で颯爽とお宅に戻って行かれた。最後まで，いい意味でのスタイリストであった。玉置さん，小生は，もう暫くこの世に留まって生きて行くつもり。と言ってもそう永くは無い。また会える時が来るまで，どうか見守っていてほしい。

今回，このようなテーマの拙稿をお寄せしたのは，かつて何回か，貴兄より明治期の用字・用語，辞典等について御下問を受けたえにしからである。例によって中途半端になってしまった。何卒ご笑覧いただきたい。